

東京藝術大学附属図書館蔵 『山鳥秘要録中律呂之論』

—— 解題と翻刻 ——

明 木 茂 夫

はじめに

本稿は東京藝術大学附属図書館所蔵『山鳥秘要録中律呂之論』¹⁾ に対して本文翻刻と校勘・解題を試みようとするものである。筆者は現在豊田市中央図書館所蔵の江戸期抄本『律呂』²⁾ について調査中であり、その過程でこれが安倍季良^{すえはら}（一七七五―一八五七）撰『山鳥秘要抄』原本の内の楽理部分を書写したものであることが判明した。さらに同じ『山鳥秘要抄』名の種々の写本も併せて調査する中で、この『山鳥秘要録中律呂之論』が基本的には『山鳥秘要抄』の抜書きでありながら、一部『山鳥秘要抄』諸本とは本文を異にしていることを見出した。そこで本書の校勘・翻刻を行い、以て江戸末期の楽人の律呂や転調に関する所論を整理し、また関連諸本の相互関係を明らかにするための一助としたい。以下専門外であるが故の誤りが多々あること、予め諸氏のご批正を乞う次第である。

一、解題

東京藝術大学附属図書館所蔵本（請求番号1・372）は『龍笛吹艶論』と『山鳥秘要録中律呂之論』がそれぞれ前半後半に綴じられた合冊となっている。封面題箋には「兼頼宿祢龍笛吹艶論」「季良朝臣律呂之論」と併記されており、本文冒頭1葉表²⁾には「季良朝臣 山鳥秘要録中律呂之論」とある³⁾。

さて本書を読み解くには、本書のみ見ては十分ではない。『山鳥秘要録』中の『律呂之論』という書名から明らかなように、まず『山鳥秘要録』という書物があつて、その中の律呂論を独立させたものとなっている以上は、『山鳥秘要録』と題する一連の書物との比較を欠かすことは

できない。そこで、本書と関連の深い諸本をまず整理しておく。

A 安倍家所蔵本

安倍家所蔵『山鳥秘要抄』 〓 安倍家原本 全36冊

B 群 Aの楽理部分の抜書き 一冊、61～64葉

豊田市中央図書館所蔵『律呂』 〓 豊田本

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『山鳥秘要抄』 〓 京大本

国会図書館所蔵『山鳥秘要抄』 〓 国会図書館本

静嘉堂文庫所蔵『山鳥秘要抄』 〓 静嘉堂本

東北大学附属図書館和算資料平山文庫所蔵『律呂抄』 〓 東北大本

山井景昭氏所蔵本『楽律鈔』 〓 山井家本

C 群 AもしくはBの抜書きを再編集したもの 一冊、6～21葉

西尾市岩瀬文庫所蔵『呂律反音事』 〓 岩瀬文庫本

東京藝術大学附属図書館所蔵『山鳥秘要録中律呂之論』 〓 藝大本（本書）

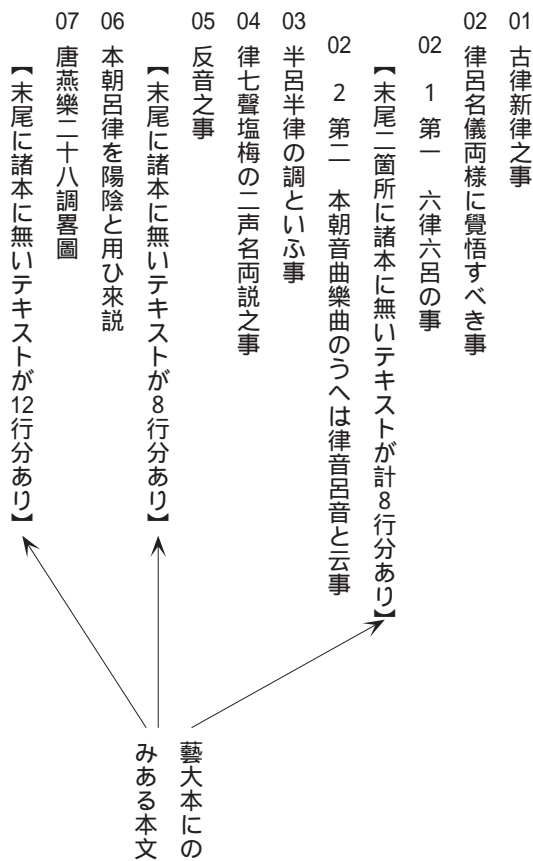
Aは京都方楽家の安倍家に所蔵されているもので、現在非公開となっている。その概要は、安倍家現当主安倍季昌すえまさ氏の著書『雅楽筆策 千年の秘伝』⁽⁵⁾で知ることができる。それによればこれは安倍季良が「古記や日記をまとめたもの」であり、「仁」「智」「禮」「義」「信」の五部、全36冊からなる書物であると言う

B群は『山鳥秘要抄』もしくは『律呂』『律呂抄』『樂律鈔』と題するもので、筆者の調査によれば、細かな異同はあるものの、その内容は基本的に同一である。⁽⁵⁾いずれも六十数葉からなる一冊本であり、Aとは分量があまりに異なる。この点から、B群の書物はAの内の特に楽律に関連する部分を抜書きして一冊としたものではないかと推測される。

C群は、B群の書物に比べてさらに葉数の少ないもので、B群の本文の一部を抜書きして、順序に変更を加え、或いはBには無い本文や図表を

加えた、再編集版と思しき抄本である。恐らくは、安倍季良自身が楽理を講ずる上での必要に応じて、エッセンスを抜き出して編集を加えたものだと思う。以下、本書を「藝大本」と称し、また他の諸本についても右に示した略称を用いることとする。なお、A・B群・C群の書物の概要については前掲拙論を参照願いたい。

さて今、諸本と比較するに、藝大本の本文は基本的にB群の書物の「01 古律新律之事」から「07 唐燕樂二十八調畧圖」までを抜粋したものであることが分かる。「08 傳來の調子根源の事」以降「12 かへしもののつたの事」に至る部分は含まれていない^⑥。但し、途中四箇所ほどに、他の諸本に見えないテキストが挿入されている。その概要を図示するならば次のようになる。



08 傳來の調子根源の事

09 本朝の樂書むかしは廿八調の儀所見の事

10 跋一（和文）

11 跋二（漢文）

12 かへしもののうたの事

↑ 藝大本に無し

12 葉裏の「反音輪轉圖」（「管絃音義」の引用部分）については、同心円を省略し、円周の外の調子を示す文字も全て省略した、簡略化した図になっている。

藝大本の本文末尾、第20葉裏、21葉表には識語がある。文言は以下の如くである。

安政五歲次戊午十二月寫（花押）

時元治改元甲子歲八月中旬於洛東

知恩院塔頭浩徳院遂書寫之

功訖

尾張微臣

青木齋宮（花押）

安政五年は一八五八年。十二月は一八五九年。

文久四年は一八六四年。改元が行われて元治元年となる。

ところでこの藝大本は、『兼頼宿禰龍笛吹艶論』と合冊となっている。その前半に綴じられた『龍笛吹艶論』の末に置かれた識語には次のようにある。

右自筆にて反故ノ裏ニ書付被置ルヲ、予

寫之。為後代覺寤書記者也。于時寶永

第七之春 從五位下左兵衛大尉太秦廣伴

安政四年丁巳五月寫 狛真節（花押）

時元治元年甲子八月廿三日於洛東

知恩教院中浩徳院仮署書寫

之訖

青木齋宮（花押）

安政四年は一八五七年。

元治元年は一八六四年

合冊前半の『龍笛吹艶論』と後半の『季良朝臣律呂之論』にはいずれも狛真節（しらのまねり）と青木齋宮（蔵書家の青木信寅）⁷⁾の名があり、それぞれに花押がある。⁸⁾

二、翻刻

藝大本の校勘や翻刻に際しては、基本的にB群の書物と比較対照することとなる。但しB群の全てを対象とすればやや繁雑となるため、ここでは特にB群の代表として豊田本を校勘に用いることとする。それは、他本と異同がある場合豊田本の方がしばしば正確であること、頭注や巻末追加部分に欠落が無いこと、朱墨の補足部分に欠落が無いこと、文字の校勘や注釈の小字書込みが多いことを考慮してのことである。また豊田本に誤字がある時、他本はその誤字をそのまま一旦書写した上で、傍らに小字で修正を書き入れている場合があり、このことは豊田本のテキストがオリジナルに近いことを想像させる事象である。

以下藝大本を翻刻するに当たっては、以下のような原則に依った。

- ・ユニコード文字の範囲で原文の字体に最も近い文字を用いる。
- ・原文に無い句読、濁点・半濁点を補つ。

- ・「」は「こと」とするなど、合略字は仮名に起こして表記する。
- ・割り注は「」内に収める。上欄の頭注は【頭注……】で示す。

季良朝臣山鳥秘要録中律呂之論

古律新律之事

三五要録云、今案古律太簇新律黄鐘、其聲同。

中横笛六孔、是即今沙陀調音也。

西園寺太政大臣実兼公阿月問答云【（取要本云弘安十八四）】、新

古兩律不同之事、具被載類聚樂録。件書知是

院入道關白被撰之。彼禪閣妙音院御祖父也。

於箏御師也。律法有新古兩儀之不同。古律謂之雅

樂律、唐玄宗代天寶十二年以前所用之律也。

新律謂之燕樂律、肅宗代所改製之律也。新

律高於古律二均、古太簇今黄鍾、共當横笛六

孔。

冊府元龜云、天寶十三載七月十四日改請樂名云々

沈存中筆談云、外國之聲前世自別為四夷樂、自

唐天寶十三載始詔法曲與胡部合奏。自此樂奏

全失古法、以先王之樂為雅樂、前世新聲為清樂、

合胡部者為宴樂。古詩皆詠之、然後以声依詠以

曲謂之協律。

私云、本朝又此法を用ひらる。則神樂は雅樂正声

（1葉表）

「製」豊田本「制」に作る。

（1葉裏）

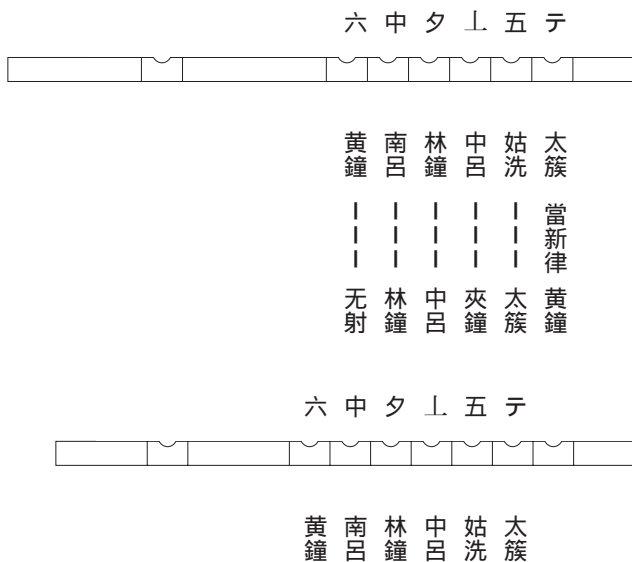
にして祭祀に用らる。依之用雅樂律。唐樂は節會以下宴儀に用ひらる。依之用燕樂律。

雅樂式曰、凡諸樂橫笛師等不解和笛不任用。

新律高於古律二均之圖

古律 太笛

新律 橫笛



体源抄太笛條橋元輔云、石清水臨時祭明朝二八太笛ヲ平調ニ吹テ山城ヲ歌テ退出ル也ト云々

(2葉裏)

「不」豊田本「不得」に作る。

私云、コレハ古律ヲ以テ書タル也。今世人イタク知ラヌコト也。

又曰「^十」樂ノ品々チニワカレタリ。今ノ神樂何ノ樂流ゾヤ。答

漢家ノ法ヲ案ズルニ歷代ノ正声ヲモテ雅樂トシテ祭祀

已下二用ユ。古樂西胡ノ樂ヲ號ス。別國ノ風俗ヲ備フ。今關ノ

神樂ハ本朝開闢ノソノカミ天照大神之御事ヨリ

起レリ。本朝ノ樂神樂ヨリ先タテタルハナシ。是正聲為

雅樂漢家ノ樂ヲ奏セシム。別國ノ風俗ニ擬スベキカ。

私云、此事ハ大嘗會ニテ其事分明ナリ。大嘗會卯日奏

國風四威^⑩コレラムカシヨリ神樂歌ト謂テ則神樂ノ

根ニ作シ、辰日巳日風俗ハ樂曲ヲ作ナリ。是賜宴群

臣儀也。コレニテ雅樂燕樂ノ事可知。

律呂名儀兩様ニ覺悟スベキ事

第一六律六呂之事

私云、律呂ハ則陰陽ノ声ニシテ陽ヲ律トシ陰ヲ呂トス。

是律呂ノ本源也。コノ故ニ

黃鐘 太簇 姑洗 蕤賓 夷則 无射 是ヲ六律トス
大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘 是ヲ六呂トス。

此六律六呂ハ天地自然ノ聲也。

樂書要録云「^{上略}」声不虛立因器乃是。^⑪故制律呂以紀名焉。十二律者天地之氣十二月之声也。循環无窮、自然

「威」豊田本「成」に作る。

「雅樂」豊田本「雅曲」に作る。

(3葉表)

「是」豊田本「見」に作る。

恒數、雖大極未非而冥理存焉。然象无形難以文載、雖

假以分寸之數粗可存其大略、自非手操口詠耳聽心思、

則音律之源未可窮也。故察雍月令章句云、古之

為鍾律者以耳齊其聲、後人不能則假數以正其度。

く數正則音亦正矣。以度量者可以文載口傳与衆共知、然

不如耳決之明也。此識知音之至言入妙之通論也。

樂書要錄曰、大戴礼曰、聖人慎守日月之數、以審星辰

之行、以序四時之順逆、謂之曆。截十二管以察八音之

上下清濁、謂之律。く曆通相理、其間不容髮。

律曆志曰、律有十二、陽六為律、以統氣類物。一曰黃

鐘、二曰太一、三曰姑一、四曰蕤一、五曰夾鍾、六曰中呂、¹⁴黃

帝使伶倫自大夏之西崑崙之陰、取竹之解谷〔孟康曰
解谷在岐山之北谷名也〕

〔谷竹滿也、取竹之腕无滿節者、
謂曰斷節之北谷名也〕一、生其竅厚均者〔孟康曰
之也、竅孔也〕

二、斷兩節間而吹之、以為黃鐘之宮、制十

二箏以聽鳳皇之鳴。于雄鳴為六、雌鳴亦六、以此黃鐘

之宮而皆可以生之。是為律本、聖化之代、天地之氣

合以生風、天地之風氣正、十二律定。

三礼義宗曰、十二律者謂陽管有六、陰管有六、凡

有十二、配之十二辰、故有十二律。子為黃鐘、丑為大呂、

寅為太簇、卯為夾鍾、辰為姑洗、巳為中呂、午為蕤

賓、未為林鐘、申為夷則、酉為南呂、戌為无射、亥

為應鍾。陽六為律、黃一、太一、姑一、蕤一、夷一、无

一、此六者陽月之管、謂之律。く者法也。言陽

氣施生、各有其法。一義云、律者帥也。所以帥導陽

「非」豐田本「兆」に作る。

「察」豐田本「蔡」に作る。

(3葉裏)

藝大本脱誤あり。注14参照

「于」豐田本「其」に作る。

(4葉表)

氣、使之通達。陰六爲呂、大^一、應^一、南^一、林^一、中^一、夾^一、此六陰月之管、謂之呂。く者助也。所以助朋成功也。一義云、呂者侶也。所以對律導氣、與之爲侶也。

又小陰陽大陰陽之說。

朱子語類曰、樂律自黃鐘至中呂皆屬陽、自蕤賓至

應鐘皆屬陰、此是一箇大陰陽。黃鐘爲陽、大呂爲陰、太簇爲陽、夾鐘爲陰、每一陽間一陰、又是一箇小陰陽云々。

季尚朝臣云、所謂小陰陽者、陰陽互相交成次第者也。

堯舜法求一律之實數損益之。三分而益者爲陽、損

者爲陰。盖神伸陰窟、是理當然者也。其所謂大陰

陽者、初六管爲陽、終六管爲陰、則陽管或屬陰、蕤^一

夷^一无^一是也。¹⁵陰管或屬陽。大^一夾^一仲^一是也。¹⁶然則

只似強分大陰陽也。予疑於是。有年。今以所製銅管考

其聲而始有覺也。盖陽律中之陰管者、陰而有陽聲、

陰呂之中陽管者、陽而有陰聲矣。以其聲相應可識之。自陽

律至陰呂者、其声柔而相應〔自中呂以下六管實以〕。自陰呂生陽律

者、其聲剛相應〔自大呂以下六管實以〕、是所謂一箇大陰陽而所以律

呂分矣。

大陰陽八上六律ヲ陽トシ、下六律ヲ陰トス。此事八三分損

益ノ上生下生ヨリ自然ト如此ナルコト也。

周礼云、黄鐘初九下生林鐘初六、林鐘又上生大簇九二、

大簇又下生南呂六¹⁷、南呂上生姑洗九三、如洗又生

「神」「窟」豊田本「伸」「屈」に作る。

(4葉裏)

「製」豊田本「制」に作る。

豊田本「而」字無し。

「至」豊田本「生」に作る。豊田本「而」無し。

以上の2行豊田本に同一の文言無し。

「如」豊田本「姑」に作る。「如」は誤り。また「生下」は「下生」の誤り。

下應鐘六三、應鐘又上生蕤賓九四、蕤一又上生大呂六四、大呂又下生夷則九五、夷則又上生夾鐘六五、夾鐘又下生无射上九、无一又上生中呂上六。

上六律八陽律下生陰律トイヘドモ、蕤賓ヨリ已下六律八陽律ヨリ又上生陰律。陰律又下生陽律。因

茲黃鐘、大一、太一、夾一、姑一、中一、蕤一、林一、夷一、南一、无一、應一ト長短為次第、是大陰陽ノ理ナリ。

大呂雖陰律、上二生スル八陽也。夷則陽律トイヘドモ、下生スル八陽中ノ陰也。已下準之可知ナリ。¹⁸⁾

(5葉表)

以上の6行豊田本に同一の文言無し。

本朝¹⁹⁾音曲樂曲ノウヘニテ律音呂音ト云事

私云、本朝音曲樂曲ノウヘ律音呂音ト云ハ又一ツノ習

也。是ハモロコシノ音ニ見ユル律呂トハ別ノ習也。此事混シヌレ

バ基マトヒ出来テサトシガタシ。サレバ後西園寺太政大臣

実兼公ノ書セ給フ音律ノフミニモ呂音ノ條²⁰⁾二八、非六律

六呂之呂、樂曲音曲等之呂也。²¹⁾又一ツノ條二八、依六律六呂

圖²²⁾之云々、箇様ニ注シメ玉ナリ。兎角律呂ノ名儀八兩

様ヲ覚悟スベシ。

「音」豊田本「哥」に作る。

本朝ニテ呂音ト云ハ七聲相生ノ次第モロコシノ相生ヲカハ

ルコトナシ。宮生徵、々生商、々生羽、々生角、々生變宮、々、

生變徵、如此各歷八相生也。歷八相生スルコトヲ尋常

二八順八逆六と云習セリ。²⁴⁾

「ヲ」の傍に「と歟」と書込みあり。

此呂調八一越調 双調 太食調也。

(5葉裏)

宮〔律隔〕 商〔律隔〕 角
〔徵変〕

一越	黄	太簇	姑	蕤	林	南	應
太食	太	姑	蕤	夷	南	應	大
双調	中	林	南	應	黄	太	姑

以上呂ノ七聲ト云。比巴箏シラベ如此。但太食八半

呂半律ニシラベ、一越調双調八樂曲八半呂半律也。⁽²⁶⁾

本朝ニテ律音ト云ハ七聲相生ノ次第モロコシノ相生

ノ法ト異ナリ、宮生徵、々生商、々生羽。サテ商ニ相次テ

一律高キ律ヲ嬰商トシテ嬰商生嬰羽、々々生

角也。是ヲ律ノ調法トシテ律音ト云ナリ。但此相生

唐ノ法ニ異ナリテ、故人多コレヲ難ズ。然レドモ其真実

唐ノ相生ノ法也。是深キ口傳アリ。委シクハ奥ニ注シヌ。

一越^一、沙^一、平^一、太^一、乞^一、性^一、双^一、黄^一、
水^一、盤^一。以上調子ノ事、説^レアリトイヘドモ
先六調ノ呂律ト半呂半律ノ事ヲ申也。コノ大意ヲ
得テ余ノ調子ノ事ヲ考フベシ。

此律ノシラベ次第相生ニ秘事アリ。是ハ嬰商
ヨリ相生スル時ハ次第皆順ハ逆六ノ相生ニカナヘリ。
先其次第ヲ申ベシ。

嬰商、嬰羽、角、宮、徵、商、羽ト次第二生ズルナリ。
嬰商トハ宮声ニテ宮は則羽ニアタレリ。是深キ口傳也。
聲明用心集云、悉曇藏笛五音自角相生終于

羽位、主有五條、各分律呂云々。只五音ヲ云トキハ、
角、宮、徵、商、羽ト相生スル也。

又妙音院殿御流ニテ云トキハ角、變宮、變徵、
商、羽ト、如此次第二生ナリ。其實ハ是同ジ。只名ノミ違ヒ
ワカツナリ。⁽²⁷⁾

半呂半律ノ調ト云事

私云、本朝ニハ半呂半律ト云調アリ。是ハ右ニ云呂
ノ七声ト律ノ七声トヲ交ヘタル七声也。是ヲ半呂
半律ノシラベト云也。但シ又コレニ二ツノ様アリ。律ニ
シテ呂ヲ兼タル七声アリ。一越^一、太食^一是也。
又呂ニシテ律ヲ兼タル七声アリ。雙^一、水^一、
是也。⁽²⁸⁾

【但水調ハ變律ニシ
テ呂ヲ兼タル聲】

(7葉表)

「只名ノミ違ヒワカツナリ」 豊田本「只名の違ひばかりなり」に作る。

「盤」字は×印で訂正した跡あり。

此半呂半律ト云コト八唐ニテハ其名ナシ。我國ニテ立タル
 名ナレドモ其實八唐ノ法也。此四調皆商調ノ曲也。依之
 唯呂ニシテ樂曲ニオイテ音ヲ具セズ、是天地自然之
 理也。巨細輿二注シヌ。

(7 葉裏)

太食	一越	宮
太一	黄一	商
姑一	太一	呂角
蕤一	姑一	律角
林一	中一	徵
南一	林一	羽
応一	南一	嬰羽
黄一	無一	

右之図律兼呂而為半呂半律

水調	双調	宮
林一	中一	商
南呂	林一	呂角
応一	南一	律角
黄一	无一	徵
太一	黄一	羽
姑一	太一	變宮
蕤一	姑一	

右圖呂兼律不為半呂半律之法也。

但於水調八猶律而兼呂歟

又呂律之七声ヲ交ル九声ノ曲アリ。太食調、

水調ニ此曲多シ。タトヘバ、

(8 葉表)

「交ル」豊田本は「交ハ」に作る。

水調	太食	宮
林一	太簇	商
南一	姑一	嬰商
无一	中一	呂角
応一	蕤一	律角
黄一	林一	徵
太一	南一	羽
姑一	応一	嬰羽
中一	黄一	反宮
蕤一	太一	

已上半呂半律之曲也。

私案、水調曲比巴二八蕤實ノ音ヲ彈ズ。笙二八中呂ノ

音有り。中呂八嬰羽ニシテ律呂ニナルナリ。蕤賓八變宮ニシテ呂ノ音ニナレリ。^③

「律呂」 豊田本は「律音」に作る。

律七聲塩梅之二声名兩説之事

私云、七声ニテ八塩梅ノ二声ヲサシテ嬰羽嬰商ト云、是也。人常ニシルトコロ也。昔ハ是ヲ大原流ト云也。又一説二音ノ位ハ違ヒアレドモヤハリ變宮變徵ノ名ヲ立ル。是ヲ妙音院殿ノ御説ト云。則仁智要録、三五要録、皆此説ヲモテ注シ玉ヘリ。是亦ムカシヨリ樂堂ノ家ニ傳ハリタル説ナルベシ。今ノ世ニハ人コノ説ヲ知ラヌヤウニ成タリ。ナゲカハシキコト也。本朝ノ古文書ヲ見ニハ此兩説ヲ考ヘテ見ルベシ。

(8 葉裏)

音律事曰「西園寺右大將實兼御御撰
正応二年九月十五日記文也」

大原声明師蓮入房流於律七声有異儀云々。當流ト彼流ト於声无差別、名之付様有相違。宮、商、徵、羽ノ四ヶ聲ハ兩説存知无差別。角、反宮、反徵三声有子細也。蓮入房流律ニハ限五声、宮、商、角、徵、羽之五音、全反徵、反宮之二音云々。^④然者以當流之角称彼流之商塩梅、以當流之反徵称彼流之角、以當流之反宮称彼流之羽之塩梅云々。此外呂七聲並六律六呂之所配、當流存知无差別云々。只至律七声之名目有異儀也。

豊田本「全」の次に「无」字あり。

(9 葉表)

阿月問答、弘安十八四、実兼公御押紙二就阿月兩道書條く不審事。³³

仁智要録曰、平調律。右件調、二七為宮、八巾

為商、三並推タル八巾為角、四九為變徵、一五十為徵、

斗並取六為羽、六並推タル斗為變宮。³⁴

但宮、商、徵、羽四声有合相生法。角、變徵、變宮

三聲者一律下歟。何則假令太簇為宮者、須蕤

賓為角、夷則為變徵、大呂為變宮也。而當調

二絃為宮聲當太簇、三絃為角声當中呂、四九

絃為變徵當林鍾、六絃為變宮聲當黃鐘、

故知一律下也。³⁵

如右者律調二變正徵正宮ヨリ二律下タルコト云。

其詞云其聲勿論歟。但於當流者二變並角三ヶ

聲、雖不合相生法猶假其名。自他流之異議只

在此事歟。但妙音院於真實之御内證者聊

有子細。且粗見此譜然當時所用箏並比巴之

譜、律調一律サガレルヲ三ヶ名ヲ付「角並並變」。其上今一

儀人遍不知之。仍暫論自他流之異儀也。然

與當流人尤有存知、不射他人難歟。

反音之事

私云、御遊之時先呂遊アリテ反音二ナリテ、律遊

「並角三ヶ聲」 豊田本「并二箇声」に作る。

(9葉裏)

是定レル事也。其本意ヲ知ラザレバイカナルコトニテ

反音ト云事ナリトシラズ。コレハ同均ナルノ故也。

【全体双八調ト云ハ

夾鍾均ノ音調也。同均「アラス」本朝ノ習ニ呂ノシラベハ中呂ヲ宮トシテ

七聲ヲ次第二立タリ。是即中呂均也。初平調八素

ヨリ中呂均ノ羽調ナリ。コレニヨテ七声カハリナシ。然バ初二

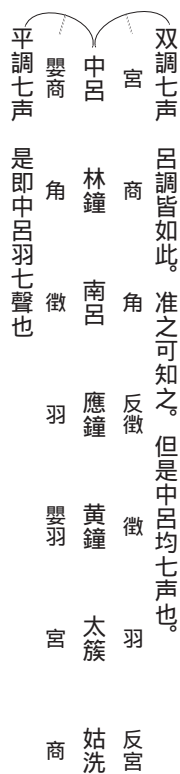
宮調ヲ奏シテ其羽調ニ反音スルコト也。

今世爭彈法ムカシニ替リテ律八五聲ニシラベ呂

八元ヨリ五聲ニ彈ズ。カタゞ反音ノ儀ナシ。本意

ヲ失ヘリ。古譜ヲ見テ能クコレヲ解スベシ。此事便覽

ノタメ左ニ図シタリ。



如此同均也。則廿八調ヨリ出タル儀也。依之反音ニ成ナリ。

大原声明師是ヲ羽調ノ反音ト云。

全脉双調ハ夾鍾均ノ商調也。樂ノ言則春庭樂柳花

苑皆半呂半律ノ曲也。是夾鍾商ノ樂ナリ。然レドモ本

朝ノ習、呂ノシラベト云ハ中呂ヲ名^呂ト云テ七聲ヲ定メタリ。是

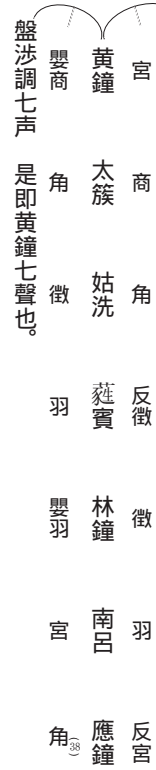
ニヨリテ能反リ音ニ叶ヘリ。

割注「音調」豊田本「商調」に作る。

(10葉表)

「名」を「呂」に訂正した跡あり。

壹越調七声 是即黄鐘均也。



(10 葉裏)

應鐘の左の「角」豊田本「商」に作る。

如此同均也。是亦廿八調ヨリ出タルコトナリ。

但一越調ト云ハ無射均ノ商調也。樂ノ言ハ則多クハ

半呂半律也。是則无射均ノ七聲ヲ備タリ。

本朝呂ノシラベハ一越調ナレバ即黄鐘ヲ宮トシテ

七聲ヲ立タリ。是即黄鐘均ナレバ盤涉調ハ黄鐘

羽ニヨリテ反音ニナル也。

御遊二八呂ハ双調、律ハ平調、是定タルコト也。又呂二八一越、

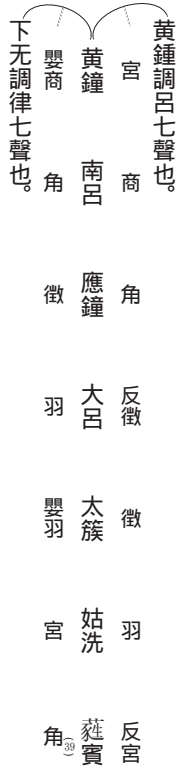
律二八盤涉ヲ用ラレタル例、御遊部類二数度見エ

タリ。又大法會四ヶ法要ノ樂二唄散華讚マデハ一越調

ノ樂ヲ用ヒ、梵音錫杖二至、盤涉一樂ヲ用ラレタル例、

古記繁多也。皆反音ノ儀也。

(11 葉表)



蕤賓の左の「角」豊田本「商」に作る。

是亦同均ナレドモ、今世下无調ノ樂ナケレバ巨細二及バズ。

又聲明道二八反音ノ事專用ノ習也。或ハ甲乙反音、

商ノ反音、羽ノ反音ナド申テ唱物一ツノ中ニ反音アル也。

樂曲ノ習ニモアルベケレドモ、今世人イタク云又事ニ成ニタリ。

傳來筆策抄ニモ、宗明樂ノ内第六大鼓マヘ平調

音ト季長朝臣注サレタリ。

声明用心集云、沙陀調曲安樂塩一徳塩洪河

鳥等羽調ノ反音ヲ兼トアリ。此条数曲不能枚挙。

私考皆其謂分明也。能く可考。

(11葉裏)

残夜抄、調子ノウツリ、、、、、

略頌ニ云、――――⁽⁴⁰⁾

【頭注 此二条歌舞品目詳也】

一實兼公宰円僧都ト二變律ニ称スルコトヲ問答ノ書ノ
中、双調本朝同均ノ事ヲ述ラレタリ。⁽⁴¹⁾

以之案之、妙音院殿御流、孝道朝臣並西園寺相

国實兼公、皆二十八調ノ説ヲ用ヒ玉フト見エタリ。

反音ノ儀、此条正説ト可為者也。

「本朝」豊田本「平調」に作る。

今一説之事 笛ノ穴ニテ立タル説

管絃音儀曰、反音――――⁽⁴²⁾

【頭注 此条哥舞品目詳也】

或亦所以名返音者、凡此七聲皆是自甲至乙惣有四重
音、是則一音中四時音也。四時者即春夏秋冬之

(12葉表)

四季也。故知甲者音始也。乙者音終也。而反音之

時皆以前第三秋位乙音為後第一春位甲音。如

彼五声⁽⁴³⁾等種物體。雖一秋熟位名果、春植時為因此

七音。如此以先調子第三秋之果音為次調子第一

春之因音也。前果返為後因、故名返音也。是則

五聲五行音、故其義相同也。又云凡返音時越

二音、故各於其門有二調子。⁽⁴⁴⁾此又以返音次第輪

轉也。起越一音至次調子者、秋音返成音、故

逆越夏一音也。謂如平調音也。餘例之可知

之云々。

私云、以上取要注之。此說八笛ノ穴ヨリ如形ツゞケタル説也。

タトヘハテ五上タ中丁六、此七音ノ中四ツヲ取、テ六

丁中第一ノテヲ甲トシ、中ヲ乙トシテ、先初ノテヨリ

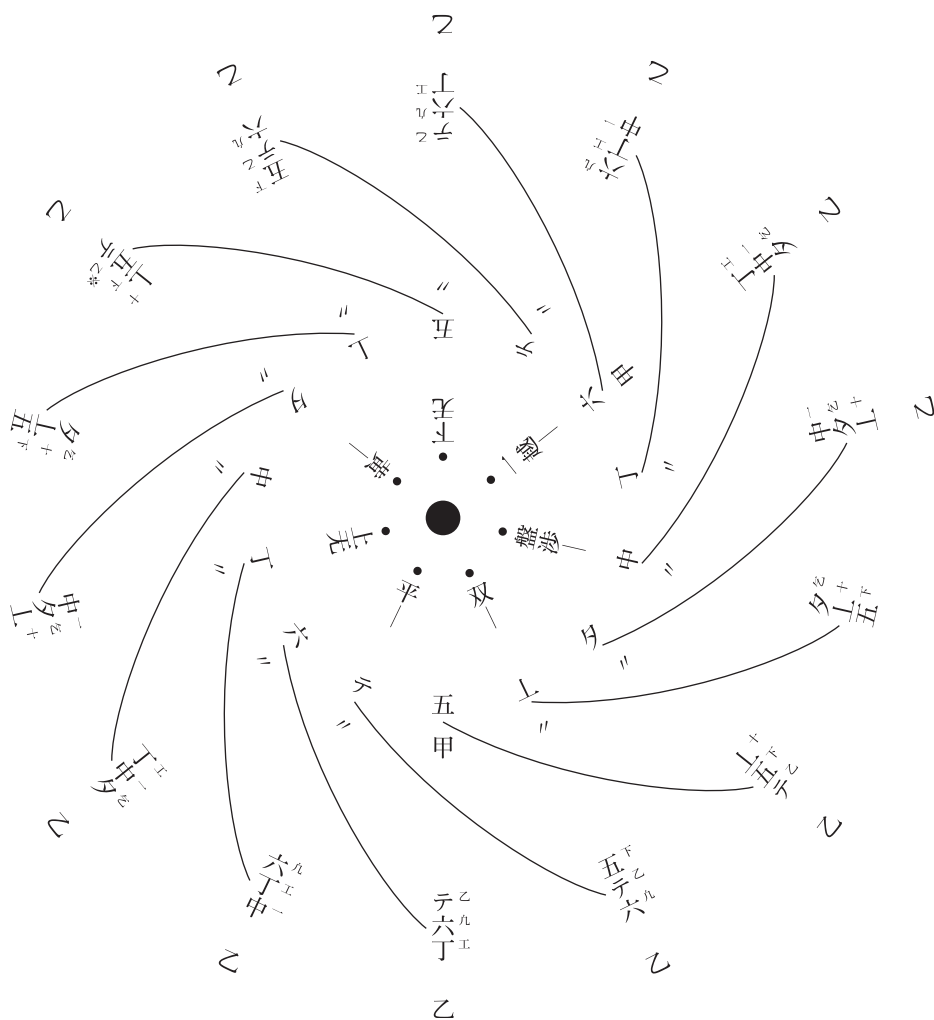
第三ノ中ノ音ニ反音スルナリ。但コレ八道理ニテ音

律ノ反音八位アハヌナリ。

「門」豊田本「間」に作る。

反音輪轉圖

※原文「凡」に作るも
今「乙」に改める



又曰、仁王經曰、生老病死、輪轉無際、即此義也。或亦

(13 葉表)

所以名返音者、凡此七音皆是自甲至乙、惣有四重

音、是則一音中四時音也。四時者謂有情生老病死、

世界生住異滅也。生住異滅者即春夏秋冬之四

時也。故知甲者音始也。乙者音終也。謂春位音名

甲、滅位音名乙也。而返音時皆以前第三秋位乙音為

後第一春位。甲音如彼五穀等種物体、雖一秋

熟位名果春殖時名。因此七音如此以先調子第三

秋之果音為次調子第一春之因音也。前果返

為後因、故名返音也。云々

私云、右ノ説ハ笛ノ七音ニテ次第シテ因果ノ道理ヲ

立タル説也。ヨリテマコトノ音ノ位ニ於テハ双調ト平一、一越ト

ト盤渉ト、黄鐘ト下无ト、此三調ノ外ハ返音セズ。サレ

バ孝道朝臣モ是ハ十二律ヲ能ク心得テ知ルベキコト也ト

残夜抄ニハ注サレタリ。只ケ様ノ説モ有ト云コトヲ覺悟ス

ベキ為ニ注シヌ。⁴⁵

(13 葉裏)

体源抄云、或記云御遊ニ必双調を用アル事ハ双調ハ

是仁徳也。君ノ恩ヲモテ彼徳ヲ嘆ズル故也。統秋朝臣

私云、御遊ニ双調ヲカナラズ用勿論也。又律ニハ平調ヲ

用。然ハ前ノ口傳ナラバ平調ハ臣ニツカサドル。仍君臣ノ

徳ヲ奏スルナルベシ。是隨分ノ口傳ナリ。

今案、双調を春のしらべ、平調を秋のしらべと古き

物語などに見えたれば、春秋の儀によりて必此

反音を用らる事歟。又双調を仁徳と云へば則平調を義徳なり。然れば仁義の徳を奏するなるべし。⁽⁴⁶⁾

又右の圖のこと、本朝の習八呂八宮調にて律は

其羽調なれば、宮八五音のはじめ、羽八五音の終り、

其いわれある歟。樂書要録五音の本文を載たる文云く、

宮為君、君音調則君道得、君道得則夫和妻柔、

宮室制度、各得其宜、稼穡熟成、天下和平、

四海冥服、鎮星修度、麒麟在郊〔麒麟八土之瑞也〕、聖

人自來、宮乱則荒。

商為臣、商音調則臣道得、臣道得則節義

廉直、謹身奉上、賞不違所讎、罰不阿所愛、

不畏強禦、各濟其任、兵革不用、刑伐不作、太

白修度、白虎在郊、商乱則陂。

角為人、角音調則人道得、人道得則君有惻

隱之心、好生惡穀、不奪人時、同其憂樂、人有仁施

之行而无爭奪之心、不隱山藪、競遊道藝、歲

星修度、和風順節、蒼龍在沼、木並生、角

乱則憂。

徵為事、徵音調則尊卑有別、貴賤有差、

慈讓在心、長幼有節、事無稽遲、心得其⁽⁴⁸⁾

榮惑修度、鳳凰來遊、徵乱則衰。

羽為物、羽音調則倉粟實賄通、四人安業、

各獲其利、宗廟致敬、鬼神降祉、辱星修⁽⁴⁹⁾

度、玄武來遊、羽乱則危。

(14 葉表)

「心得其」 豊田本「必得其宜」に作る。

(14 葉裏) 「稟」 豊田本「廩」に作る

季良案、中呂ヲ殊ニ呂調ノ根元トスル事、笛ノ

音イツレノ均調モ皆コレヲ具スルトイヘドモ、余ノ調

ニハカナラズシモ兼用ユル穴ナクテハ七聲ヲ備ヘ

タリ。サレバ格別ナルモノカ。又其羽調タルユヱニ平調

モ、ヨリ順声ヲナスモノナリ。

清暑堂神宴モ堀川院寛治元年⁽⁵⁰⁾以來

呂律ノ御遊アリ。其前无律遊由見于御

遊抄。

以上8行豊田本に同一の文言無し。

本朝呂律ヲ陰陽ト用ヒ來説

私云、律ハ陽ニテ男ニカタドリ、呂ハ陰ニテ女ニカタドル。

是唐ヨリ傳來ノ法ニテ前ニ本文ヲ載タリ。六律

六呂ノ儀也。マタココニ注ス。

周礼云、黄鐘初九下生林鐘初六、林鐘又上生

太簇九二、太簇又生下南呂六二、南呂又上生姑

洗九三、姑洗又下生應鐘六三、應鐘又上生蕤

賓九四、蕤賓又上生大呂六四、大呂又下生夷則

九五、夷則又上生夾鍾六五、夾鍾又下生無射上

九、無射又上生中呂上六、同位者象夫妻、

異位者象母子。所謂律娶妻而呂生子者也。⁽⁵¹⁾

私ニ云コレヲ左ニ図ス。

(15葉表)

やうなる物のねに、虫の聲より合せたる、ただならず、

こよなく響そふ心すかし、との給へバ、「^ノ詞」大將の

君、秋の夜のくまなき月には、よろづのものにとどこほり

なきに、 箏のねもあきらかにすめる心ちはし

侍れど、 猶ことさらにつくり合せたるやうなる空の

気色、 花の露もいろく目うつるひ、 心ちりて、

限こそ侍れ。春の空のたどくしき霞の間より、

おぼるなる月かげに、しづかに吹合せたるやうには、

いかでか笛のねなども、 えんにすみのぼりはて

ずなむ。女は春をあはれむとふるき人のいひ

おき侍りける、 げにさなん侍りける、 なつかし

く物のととのほる事は、 春の夕暮こそことに

侍りけれと申給へば、「^源詞」いなこのさだめよ、 いに

しへより人のわきかねたることを、すゑの世にく

だれる人の、 えあきらめはつまじくこそ、物のしら

べ、ごくの物どもはしも、げにりちをばつぎの物に

く、ありかしなどの給ひて。

岷江入楚云、「「^阿」呂八春のしらべ、律は秋のしらべ也。

本八律呂と云。律八陽、正也。呂八陰、助也。然れども

呂律といひて律を次とする也。

「^秘」ここの物曲也。日本八呂律を陰陽と用ゑなり。

唐には律呂といふ。律を先にする。

「^弄」りちをバつぎの物にとハ、春をまされりと源氏

のたまふ也。問、もののしらべここの物どもハしも、りちを

(16 葉表)

(16 葉裏)

バツきのものにしたる調曲を催馬樂のもち
いのごとく呂律と律を次にとかけるなり。

「^二催馬樂を呂律と申つけ侍り。問、本朝の伶倫

の相傳、呂律を陽陰と用來て、催馬樂に此分

なるをや。「^一勘」唐には律呂といふ。陽を先とする也。文

明唐子問答。以上一勘。

大神基政撰龍鳴抄云、五音といふ八さきに

いふいつつのこゑなり。六てうしといふことあり。

いはゆる大食調をくはへたる也。こゑ八平調におなじ

なれども、呂律の——⁽⁵⁵⁾かふなり。平調八律なり。

大食は呂なり。律のこゑ三。平調、盤渉、黃鐘也。

呂の聲三。一越、双調、太食なり。或管絃者これ

をうたがふ。平調の聲にてあるにかけたること

や八ある。なにの故に太食をわけたるぞといふ。先

達ことふ。一に律の聲三、呂のこゑ二あらば陰陽

の儀たがふべし。そのゆゑに呂三大切なり。

又平調八管絃なかの本体のこゑ也。よく／＼ひろ

くはかりもなし。これ八本文にいふ法華涅槃

等也。心はおなじけれども両部にわかれたり。

又絃類たしかにたゞされたり。心うべき事。物を

そむるにはなハあをけれど、下染にしたが

ひて色變る。くれなゐのうゑにハふたいに

なり、きハだのうへにハもゑぎになる。おなじ

藝大本「に」に作るも小字で「も」の修正あり。

(17葉表)

(17葉裏)

花なれどもかやうにかはる。それを心うべし。呂といふ
聲八をとこの聲也といふ也。律のこゑといふ八女の

こゑなり。陰陽又これをなじ。文武といふも、天

地といひ、おもてうらといふ、上下といふ、みなこれなり。

以上相違之事、律呂の本源をしらざれば審

あるべし。但まへに注したる律呂の名

儀両様あるを覚悟するときは聊ふ審なし。

其眞実八同じ理なり。子細これを注。

六律六呂にて云八、律陽呂陰。音曲楽曲の

律呂にて云八、呂陽律陰

此儀いかになれバ、本朝にて呂音と云しら

べは是宮調のしらべ也。宮より反徴に至る迄七

聲を次第に相生す。此ゆゑに名八呂と云とも

是を陽とす。勿論宮八陽也。⁵⁶

律八此呂の七聲の内の羽調を律のしらべと云。此故に

名八律と云ともこれを陰とす。勿論羽は陰也。⁵⁷

(18葉表)

一越	宮	商	角	反徴	徴 ⁵⁸	羽	反宮
七聲	黄鐘	太簇	姑洗	實	林鐘	南呂	應鐘
	宮	商	角	反徴	徴 ⁵⁹	羽	反宮
双調	中呂	林鐘	南呂	應鐘	黄鐘	太簇	姑洗
七声							

以上則前二注したる反音の儀に同じ。同均なる

ゆゑなり。宮調を陽とし、羽調を陰とす。

黄鐘調は無射均の羽調なり。これに準じて知べし。

又案、御遊と八往古ヨリ多クハ双調ヲ用ヒラル。中呂ハ四月、是陰呂ノ月ナレバ是ヲ呂トシ、太簇ハ正月、是陽律ノ月ナレバコレ律トス。コレヨリスベテ商調ヲ呂、羽調ヲ律トハ云習ハシタル事ニ成タル歟。オボツカナシ。猶後ノ明鑑ヲ待つ者也。

徒然草云、横川ノ行宣法印ガ申侍リシハ、唐土ハ呂の國也。律の音なし。和國は単律の國にて呂の音なしと申き。

私云、本朝の人の聲ハ此律のしらべによく相應したり。あやしの田夫山がつのうたへる哥も自然と此律音にハ聞えける。定て天地自然の理にかなひたる事なるべし。

教訓抄云、呂ト云男音、律ト云女聲也。
又云鳳ハ雄也。鳴律音。⁽⁶⁰⁾ 鳳ハ雌也。鳴呂音。⁽⁶¹⁾ 或令呂女聲ト云如何可尋。

体源抄云、呂律こと、呂ハ和ゲル樂ヲ以シ、律ハ平ゲル聲ヲ以ス。文選註云、黃帝伶倫氏命ジテ大夏

西岷山ノ陰ニシテ解谷ノ竹ヲ取。鳳管ヲ造ル。雄雌二

ノ声ヲモテ律呂トス。呂ハ呂音也。^{ナマル} 律ハ律音也。^{スメル} 鳳

ハ呂音ニ鳴。鳳ハ律音ニ鳴。或云、呂ハ鳳、律ハ鳳ト云。兩說相違せり。雄声ヲ律トシ、雌声ヲ呂トス。六律六

「とハ」豊田本「には」に作る。

(18 葉裏)

「トハ」豊田本「と」に作る。

(19 葉表)

呂合十二管也【中略】。又云、呂八男音也。律八女声也。
此兩說相違也。私云、鳳八呂也。鳳八律尤也。仍鳴
音ノ鳳八律、鳳八呂ナルハ戀テ鳴心也。

右二つの文ハ兩説をまじへ注したり。見る

人彼兩説を覺悟してこれを見るべし。

唐燕樂二十八調署圖

(19葉裏)

无射均	无	黄	太	姑	仲	林	南
黄鐘均	夷	无	黄	太	夾	仲	林
仙呂宮	林鐘商	商角	太	太	太	姑	蕤
南呂宮	歇指	歇指角	大	太	太	高平調	太
林鐘均	林	南	應	大	太	姑	蕤
中呂均	仲	林	南	應	黄	太	姑
道調宮	小石	小石角	應	黄	太	平調	太
夾鐘均	夾	仲	林	南	无	黄	太
中呂宮	双調	双角	南	无	黄	中呂調	太
大呂均	大呂	夾	仲	林	夷	无	黄
高宮	高大石	高大石角	林	夷	无	高盤涉	黄
黄鐘均	黄	太	林	蕤	林	南	應
正宮	大石	大石角	蕤	林	南	盤涉	應
宮	商	角	反徵	徵	羽	反宮	反宮

又以變宮為角事、樂府雜錄宋史二見エタリ。

私云、此廿八調八唐ノ法ナリ。則宮商角羽ノ四
声各七調アリ。総二十八調也。此内六調ヲ我

國に用ラル。一越調、太食調、双調、已上皆商

調也。平調、黄鐘調、盤涉調、以上皆羽

調也。此子細ヲ能ク得意スレバ、本朝ニテ申

傳フル呂調律調半呂半律ノ子細皆

此音ヲ具シタリ。是天地自然之理也。巨細

奥二注シ又。⁽⁶⁴⁾

絃管調ヲ異ニスルコト古ヨリノ例ナリ。積奠大成樂章

迎神樂咸和ノ曲、羽調凡六變各以其羽起調畢曲。歌中呂奏

黄鐘、歌林鐘奏太簇、歌南呂奏姑洗、歌應鐘奏

蕤賓、歌大呂奏夷則、歌夾鐘奏无射。

本朝二モ一越調双調ナド、絃八宮調管八奏商調曲モ

アリ。皆此類ナリ。自余猶有之事ナリ。又——⁽⁶⁵⁾

以比巴雙調合笛一越調沙汰調、以比巴風香調

合笛黄鐘調盤涉調、以比巴返風香調合笛

雙調水調、以比巴黄鐘調合笛平調⁽⁶⁶⁾調、以

比巴返黄鐘調合笛太食調乞食調、以比巴清調

合笛平調盤涉調、以比巴平調合笛盤涉調、是

等皆絃管異調和ノ事也。

「越調」豊田本「越調」に作る。

以下12行豊田本に同一の文言無し。

安政五歲次戊午十二月寫

(花押)

時元治改元甲子歳八月中旬於洛東

知恩院塔頭浩徳院遂書寫之

功訖

尾張微臣

青木齋宮

(花押)

注

- (1) 太田正弘編纂『豊田市立図書館和装本目録』豊田市立図書館一九九二、「三音楽(一) 雅楽」69頁参照。なお詳細については拙稿「豊田市中央図書館蔵安倍季良撰抄本『律呂』について——解題及び『山鳥秘要抄』諸伝本との比較——」(武内恵美子編『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター』「近世日本における儒学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」報告書『近世日本と楽の諸相』所収、二〇一九年三月発行予定)を参照されたい。
- (2) 以下藝大本の葉数については、合冊本通しの葉数ではなく、後半部『山鳥秘要録中律呂之論』の本文冒頭を第1葉表として表記する。
- (3) 寺内尚子「東儀兼頼撰『龍笛吹罷之事』と江戸時代初期の龍笛の系統」、『国際文化研究』神戸大学大学院国際文化学研究所紀要34(二〇一〇)を参照。
- (4) 安倍季昌『雅楽纂集 千年の秘伝』たちばな出版二〇〇八
- (5) 『國書総目録』(岩波書店)によれば、『山鳥秘要抄』と題する抄本は他に金刀比羅宮・勝林院等に所蔵されているがいずれも未見。また彦根城博物館・米国議会図書館にも同様の抄本があるがこれも見。
- (6) 諸本の目次には条目の番号はないが、今便宜上仮に通し番号を付した。巻頭の目次の条目名と、本文各冒頭の条目名とは異なる箇所があるが、今藝大本の各条目の名称を見るに、諸本の巻頭目録ではなく、むしろ本文冒頭の条目名に一致している。詳細は前掲拙論を参照されたい。
- (7) 反町茂雄『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店(一九九〇)14「竹添井々・岩崎弥之助と青木信寅」に、
青木信寅さんの蔵書を先代が引き取りまして、なんでも明治二十五、六年の頃でしょう、岩崎(弥之助 明木注)さんへお願いしました。ですから私がまだ店へ来ない前に本は既に岩崎さんに納まったので、実物を見ないから見当が付きませんが、良い本が沢山あったようです。
とあり、その注釈に、
青木信寅 明治初期の司法官。官は函館控訴院裁判長に至る。古筆を愛し、多く平安鎌倉時代の古写本を蒐集した。その多くは今静華堂文庫に蔵とある。
- (8) 詳細は前掲寺内氏論文を参照されたい。
- (9) 『延喜式』卷廿一は「不解和笛不得任用」に作る。
- (10) 『北山抄』巻第五は「次悠紀國奏國風四成」とあるので「成」に作るのがよからう。
- (11) 『樂書要録』卷五「辨音聲、審聲源」に「声不虛立、因器乃見、故制律呂以紀名焉」とある。
- (12) 『樂書要録』卷五「辨音聲、審聲源」に「雖太極未兆而冥理存圖」とある。

(13) 『月令章句』は、後漢の蔡邕の撰なので、藝大本豊田本いずれも誤りであろう。また『樂書要録』も「蔡雍」に作る。

(14) この部分、藝大本に脱誤あり。この箇所は『漢書』律曆志からの引用ではなく、あくまで『樂書要録』の引用である。異同を分かりやすくするため、以下藝大本・豊田本、及び『樂書要録』の該当箇所を以下並記する。

藝大本

律有十二、陽六爲律、以統氣類物。

一日黄鍾、二日太一、三日姑洗、四日蕤賓、五日夾鍾、六日中呂。

豊田本

律有十二、陽六爲律、以統氣類物。

一日黄鍾、二日太族、三日姑洗、四日蕤賓、五日夷則、六日無射。

陰六爲呂、以旅陽宣氣。

一日林鍾、二日南呂、三日應鍾、四日大呂、五日夾鍾、六日中呂。

『樂書要録』卷第六「紀律呂」

律有十二、陽六爲律、以統氣類物。

一日黄鍾、二日太族、三日姑洗、四日蕤賓、五日夷則、六日無射。

陰六爲呂、以旅陽宣氣。

一日林鍾、二日南呂、三日應鍾、四日大呂、五日夾鍾、六日中呂。

さらに参考のため『漢書』律曆志の該当箇所も添える。

『漢書』卷二上「律曆志上」

律十有二、陽六爲律、陰六爲呂。

律以統氣類物。一日黄鍾、二日太族、三日姑洗、四日蕤賓、五日夷則、六日亡射。

呂以旅陽宣氣、一日林鍾、二日南呂、三日應鍾、四日大呂、五日夾鍾、六日中呂。

(15) 豊田本「蕤賓夷則無射是也」を割注とする。

(16) 豊田本「大呂夾鍾仲呂是也」を割注とする。

(17) 豊田本は誤って「又生下南呂六」とするが、藝大本は正しく「下生」としている。

(18) 「大陰陽八上六律ヲ陽トシ、自然ト如此ナルコト也」の2行、及び「上六律八陽律下生韻律トイヘドモ、下已下準之可知ナリ」の6行は豊田本に同一の文言はないが、述べる所は豊田本17葉表裏の朱墨書き込み部分の内容とほぼ同じである。また「周礼云、下无一又上生中呂上六」の5行は豊田本の17葉裏の

朱墨書き込み3行目、7行目とほぼ一致する。豊田本のこの箇所の朱墨書き込みは次の如くである。

私云大陰陽小陰陽ノコトハ、陰陽互相交次第ヲ成ヲ小陰陽ト云。
上六律ヲ陽トシ下六律ヲ陰トス。大陰陽ト云。此事八三分損益ヨリ如
此ナルコトナリ。三分損一下生（韻律）、三分益一上生陽律。是二テ六陰
陽トナルナリ。

黄鍾下生林鍾 林鍾上大簇 大簇下生南呂
南呂上生姑洗 姑洗下應鍾 應鍾上生蕤賓
蕤賓上生大呂 大呂下生夷則 夷則上生夾鍾
夾鍾下生無射 無射上生中呂

蕤賓ヨリ大呂ヲ生ズルハ陰律ナレドモ上生スルナリ。周禮云
黄鍾初九下生林鍾初六、林鍾又上生大簇九二、大簇又生下南
呂六二、南呂又上生姑洗九三、姑洗又下生應鍾六三、應鍾又生
蕤賓九四、蕤賓又上生大呂六四、大呂又下生夷則九五、夷則又上
夾鍾六五、夾鍾又下生無射上九、無射又上生中呂上六。
如此陰律トイヘルモ上生ハ陽ナリ。又陽律トイヘドモ下生ハ
陰ナリ。依之長短爲次第、大陰陽トナルナリ。

なお豊田本のこの朱墨部分は、同じ手ではあるようだが、やや字が小さく、また文字の誤脱がやや多い。また他の伝本には朱墨書き込みのないものもあり、この部分は白紙となっている。朱墨は後から補足されたことを想像させる。藝大本はこの朱墨部分をほぼ本文に取り込んでいいると言える。

またここでは「周禮云」と言いつつも「上生」と「下生」については「周禮」と比べると異同がある。これは「周禮」が旋宮図の方式で三分損益を単純に繰り返す記述になっているのに対して、安倍季良が「蕤賓 大呂」で下生（三分損一）を行わずに上生（三分益一）を行って八度内で三分損益を行う、所謂折り返しの方式に意を以て改めたのであろうことがうかがえる。

(19) 本文構成からしてここは本来「第一 本朝音曲樂曲ノ……」となるべきところである。

(20) 藝大本・京大本・静嘉堂本は「音」に作るも、豊田本・国会図書館本・東北大本は「哥」に作る。

(21) 豊田本「非六呂之呂、樂曲音曲等之呂也」を割注とする。但しこの語句は本来の注釈ではなく、文脈からして「西園寺太政大臣実兼公の書」の語句である。

(22) 豊田本「依六律六呂圖之」を小字注とする。但しこれも前注同様に本来の注釈ではなく、文脈からして「西園寺太政大臣実兼公の書」の語句である。

(23) 京大本は「相生とかわる事なし」としている。

(24) 豊田本「歴八相生する事を尋常に八順八逆六と云習せり」を割注とする。

(25) 藝大本この空格以下音名を欠いているが、本来ならこの行は

〔宮〕〔商〕〔角〕〔徵〕〔羽〕〔變〕〔宮〕
となるはずである。

(26) 豊田本はこの後に「其半呂半律になる子細はくわしくは奥に注しぬ」の一文があるが、藝大本はこれを欠く。

(27) 豊田本、京大本、国会図書館本、東北大本いずれも「只名の違ひばかりなり」に作る。静嘉堂本のみこの部分は他の諸本と本文が異なり、「妙音陰殿御流にて云とき如左。角 変宮、変徵 宮、徵、商、羽」を頭注に置く。また本文には、

本牀七声を云とき八、前に注したるごとく嬰商より始め羽の位にて終るべし。是をよく覚悟すべし。伴侶半律のしらべと云も皆此道理也。能く考へ知べしとある。

(28) 盤渉調を削除しており、妥当な修正である。

(29) 京大本、国会図書館本、静嘉堂本、東北大本いずれも「而為伴侶半律之法」に作る。

(30) 京大本、国会図書館本、静嘉堂本、東北大本いずれも「交八九声之曲」に作る。

(31) 静嘉堂本のここに該当する部分は、他の諸本と本文がやや異なり、以下の如くより詳しく述べている。

私案 水調曲は猶律にして呂を兼たる

か。笙におきて八中呂の音を吹。仲呂八則

嬰羽にして律の音なり。廿八調にしては

小石調にありたり。但し琵琶には此

音を弾せず。蕤賓の音を弾ず。蕤賓八則

変宮にして呂の音なり。

(32) 豊田本、京大本、国会図書館本、静嘉堂本、東北大本いずれも「全无反徵、反宮之二音」に作る。また国会図書館本は「全」の前に読点を打ち、「了五音、全了」としている。

(33) 豊田本「弘安十八四」を小字注とし、また「押紙二」を豊田本は「押紙云」に作る。

(34) 豊田本「為宮」「為商」「為角」「為徵」「為羽」「為変宮」を小字注とする。

(35) 豊田本「當太簇」「當中呂」「當林鐘」「當黃鐘」を小字注とする。

(36) 藝大本割注は「音調」に作るが、豊田本等「商調」に作るのが正しい。

(37) 藝大本「名」と書いた上で取り消し線を入れ、その傍らに小字で「呂」と書き入れて修正している。但し豊田本は「宮」に作る。案するに、意味上は「中呂を宮として」とすべきである。

(38) 「南呂」が五声の「宮」ならば、「應鍾」は「商」なので、「商」とすべきである。

(39) 前注同様、「姑洗」が五声の「宮」ならば、「蕤賓」は「商」なので、「商」とすべきである。以上の三つの図表に於いて、豊田本では律呂左右の七声音名が朱墨となっている。

(40) ここで省略された部分は、豊田本等各伝本と比較するに、『殘夜抄』第七「調のうつりかはりめといふは、まつしらべーをしらめたるに、く女房のこまか

のさたにをよぶまじければはしからず」の引用である。

(41) 文脈上「双調、平調同均の事を」が正しいと思われる。

(42) ここで省略された部分は、豊田本等各伝本と比較するに、『管絃音義』「返音輪轉圖」の引用部分の内の、

夫返音者、従先調子乙音一重高音以爲調子甲音、從此甲音三重下音以爲乙音。如此次第輪環無始無際無限、名爲返音輪轉也。

である。但しこの部分の『管絃音義』の引用は、藝大本・豊田本いずれもの原文を一部省略し、また順序を入れ替えている。

(43) 「五声」、『管絃音義』「五穀」に作る。一方藝大本13葉表では「彼五穀等種物体」となっている。

(44) 「門」は豊田本始め諸本いずれも「間」に作る。「間」が正しい。またこの部分の豊田本始め諸本いずれも「一音」「一調子」とするが、『管絃音義』では「一音」「一調子」となっている。

(45) この一文、豊田本は「只かやうの説もあると云事を覺悟のために注しおきぬ」とする。

(46) 豊田本等諸本この後に「又壹越調盤涉調の時は信智の徳を奏、黄鍾調は禮の徳目を奏するべし」の一文あるも藝大本はこれを欠く。

(47) の欠字部分は、『樂書要録』巻第五の引用部分に於いても元々 になっている。これについて趙玉卿氏は『樂書要録』研究（中央音楽学院出版社二〇〇四）に於いて「此脱字疑為「草」字」（86頁）として「草木」であつたと見なしておられる。一方高瀬澄子氏は『樂書要録』の研究（東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリー二〇〇七）に於いて、西尾市岩瀬文庫所蔵抄本の上欄に「沼下恐闕嘉字」とあることを指摘しておられる（72頁）。

(48) 『樂書要録』の引用部分も「必得其宜」に作る。藝大本の誤脱だと思われる。

(49) 「辰星」豊田本「辱星」に作る。『樂書要録』の引用部分も「辰星」に作る。

(50) 寛治元年は一〇八七年。

(51) 注17参照。

(52) 藝大本、剛爻と柔爻を示す横棒の左に文字が無いが、本来は、

上九	九五	九四	九三	九二	初九		上六	六五	六四	六三	六二	初六
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

となるはずのところであらう。

(53) 藝大本「もよし」の前に空白があるが、源氏物語の本文からして「影もよし」となるところであらう。

(54) 豊田本始め諸本、及び『岷江入楚』「帚木」本文、共に「本」字無し。

(55) 藝大本は「呂律の——かふなり」のように約2字分の縦線となっている。一方豊田本等諸伝本及び『龍鳴抄』はこの箇所「律呂のたがふなり」となっている。但し『群書類従』所収『龍鳴抄』では「律呂のたがひなり」に作る。

(56) 豊田本「勿論宮八陽也」を小字とする。

(57) 豊田本「勿論羽八陰也」を小字とする。

(58) 豊田本「羽」の下に朱墨で「盤涉調」の書入あり。

(59) 豊田本「羽」の下に朱墨で「盤涉調」の書入あり。

- (60) 豊田本「鳴律音」を小字とする。
- (61) 豊田本「鳴呂音」を小字とする。
- (62) 豊田本も「令」に作る。国会図書館本は「令」と書いて傍らに小字で「今」と修正を入れている。静嘉堂本は「令」に作る。按ずるに『教訓抄』の本文の「或人云」を書き誤って「或令」としたか。
- (63) この表、豊田本では右第一行「宮」反宮」と、上第一段「黄鐘均」无射均」は朱書となっている。
- (64) 藝大本は「巨細興二注シヌ」としつつも、残り半葉ほどで終わる。豊田本等諸本は、この後にまだ十数葉が続く。またこの直後に「傳來調子根源の事」の条が置かれているのだが、これはまさにここに言う「唐の法」傳來調子」と「我國」本朝」との「巨細」を説くものである。このことから考えるに、藝大本はこれだけで完結した再編集本と言うより、完本たる諸伝本の一部を単に切り出したものに近いと言えそうである。
- (65) 藝大本この箇所、約4字分の縦線となっている。「絃管調ヲコトニスルコト……」以降の本文は豊田本始めとする諸伝本には見えないため、この省略部分の本来のテキストは不明。
- (66) ここも前注同様、他の諸伝本に見えないため、欠字が何であったかは不明。

貴重な資料の閲覧及び翻刻を御許可下さった東京藝術大学附属図書館の関係各位に、この場を借りて篤く御礼申し上げる次第である。

また本稿作成に際して貴重な御教示を多数いただいた京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究プロジェクト「近世日本における儒学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」(研究代表者 武内恵美子)の各位にも感謝申し上げます。

本稿は平成三十年度科学研究費補助金基盤研究(C)「南宋の文人歌曲創作論における転調理論の研究」(18K00149)の研究成果である。